

加古川水系史

【古来からの課題】

加古川水系は、兵庫県播磨地方を流れる東条川・志染川・美の川などの支流と、それら小河川のほとんどが流れ込む加古川によって形成されており、それぞれの川沿いに細長い平野が広がっています。古くは、畿内と九州太宰府を結ぶ官道、山陽道の入り口として栄えてきた地域です。川沿いの平野は稲作の適地として利用されてきましたが、面積が小さいことからまとまった収量をあげることはできませんでした。

一方、播磨地方の南西部には、印南野台地と呼ばれる未利用の広大な土地がありました。しかし、この台地には小さな川しか存在しておらず、瀬戸内海沿岸で雨が少なく、地下水が深い位置にあり井戸を掘ることも難しいなど極めて水の便が悪い地域でした。そのため、この台地周辺に暮らす人々は、少ない水をできる限り有効に使うため、ため池を数多く作り、農業用水として利用してきました。現在でも、この地域は日本有数のため池密集地帯として知られています。



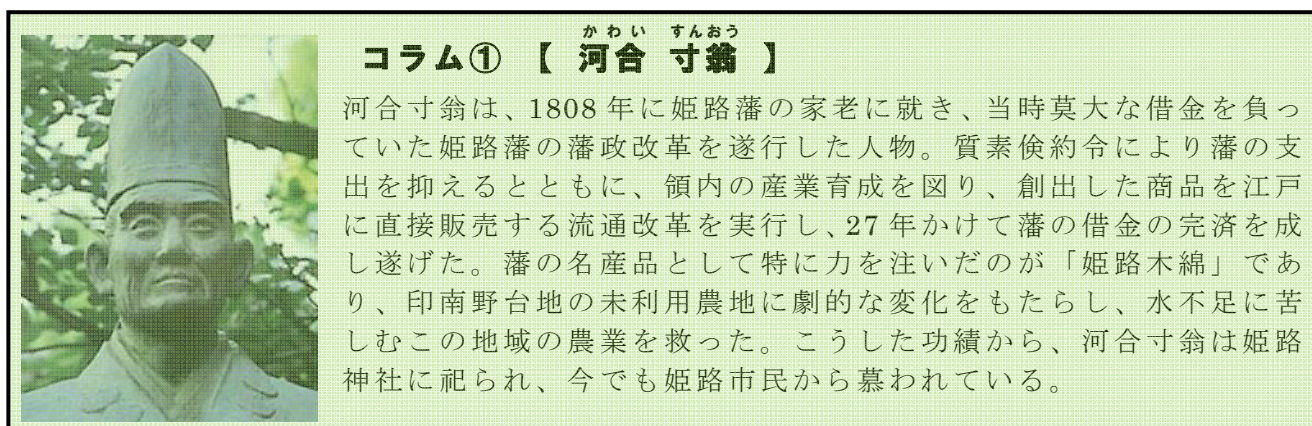
この印南野台地に限らず東播地域では降雨が少ないことから水不足が深刻で、近世においても度々干害に見舞われています。明治から昭和にかけて、およそ4年に1回の割合で干害が発生し、十分に農産物を生産することができませんでした。

【農業開発の変遷】

東播地域の農業の起源は、瀬戸内海沿岸において弥生遺跡が発掘されており、加古川や明石川の下流域の低湿地で原始的な稲作が行われていたと考えられています。6世紀初頭には聖徳太子により加古川下流部に取水堰が設けられ、川をさかのぼるように開墾が進められたと言われています。7世紀後半には公地公民制による土地区画（条里制）が始まり、東播地域においても主要河川沿いの平野には条里の跡が見られます。ところが、印南野台地では条里を示す痕跡が見られず、当時の状況下においてこの台地は開墾の見込みがない土地として見なされていたようです。印南野台地では7世紀後半にため池が築かれたとの記録が残っている程度で、この台地の水田開発は一向に進みませんでした。

8世紀後半になると、農地の私有化が認められ公地公民制は有名無実化し、有力な豪族や寺社などにより更なる開墾（荘園）が進められました。東播地域では、東大寺・住吉社・播州清水寺など有力な寺社が中心となって荘園の開発が行われました。源平時代には平清盛の本拠地として栄え、平家の巨大な荘園「五個荘」は加古川が中心となっていました。荘園の発展により川沿いの平野部の大部分は拓かれましたが、印南野台地は開墾されることはありませんでした。

戦国時代に土木技術が発達したことや江戸時代に新田開発が奨励されたことを受けて、これまで手付かずであった印南野台地がようやく開墾されることとなります。用水源としてこれまで以上に規模の大きなため池が築かれるとともに、1680年の大溝用水に代表されるように河川上流から台地へ水を引き入れることにも成功しています。しかし、河川の水は平野部での水利用が優先され、台地に導水できるのは灌漑期以外という厳しい制約がありました。そのため、河川から引き入れた水を貯めておくため池がさらに増えることとなりました。ため池に頼った灌漑では水の絶対量が不足するため思うように水田開発は進まず、かわりに綿を中心とする畑地が広がっていきました。綿栽培は、この地域を治める姫路藩家老の河合寸翁により進められ、18世紀中頃には「姫路木綿」「玉川さらし」と綿の一大生産地として全国的に有名になっていきました。



コラム① 【かわい すんおう河合 寸翁】

河合寸翁は、1808年に姫路藩の家老に就き、当時莫大な借金を負っていた姫路藩の藩政改革を遂行した人物。質素儉約令により藩の支出を抑えるとともに、領内の産業育成を図り、創出した商品を江戸に直接販売する流通改革を実行し、27年かけて藩の借金の完済を成し遂げた。藩の名産品として特に力を注いだのが「姫路木綿」であり、印南野台地の未利用農地に劇的な変化をもたらし、水不足に苦しむこの地域の農業を救った。こうした功績から、河合寸翁は姫路神社に祀られ、今でも姫路市民から慕われている。

姫路神社『河合寸翁の銅像』（写真提供：泉秀樹氏）

【近代の新たな課題】

幕末から明治にかけて鎖国が解禁されると、海外から安い綿花が大量に輸入されるようになり、綿栽培が主力であった印南野台地の農業は危機的な事態に陥りました。さらに、明治6年の地租改正により、従前の約3倍とも言われる重い課税が農地へ課されることとなり、この地域では綿にかわる新しい農作物を栽培する必要に迫られました。当時、この地域の地価は綿畑として高く設定されていたため農家は食べ物にも事欠くようになり、より地価を下げ主食を確保するという目的から水田開発が切望されるようになりました。

水田開発に当たっては、水を確保することが最優先の課題となります。印南野台地に水を供給するためには、加古川上流の河川から山々にトンネルを掘るという大規模な工事を行わなければなりません。江戸時代から計画は立てられたものの、莫大な工事費用を要するという財政的課題と河川下流の住民の理解が得られないという社会的課題により実現されることはありませんでした。

この地の窮状を打破する起死回生の策として、明治の殖産興業政策の一環で日本初の国営播州葡萄園が創設されました。この事業自体は結果的に失敗となりましたが、内務省や農商務省の政府高官が先進地視察に訪れたことにより、この地方の窮状を理解してもらう機会となり、疏水の実現に向けて大きな弾みとなりました。この間、市井の人々によって兵庫県令へ疏水開発の嘆願が繰り返し行われた結果、明治19年に淡河川疏水の工事が決定し、同24年に完成にまで至りました。



『淡河川疏水』

(写真提供：(社)土木学会附属土木図書館)



うおずみ いっし
コラム② 【 魚住 逸治 】

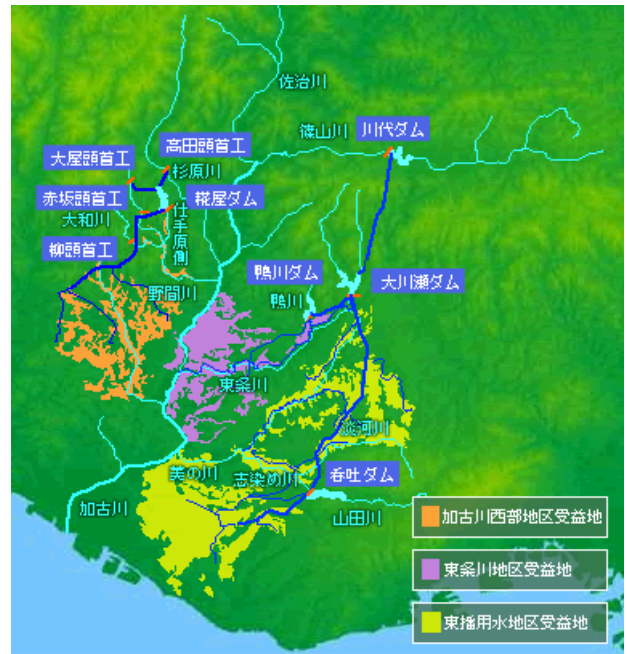
魚住逸治は、若い頃から叔父完治とともに印南野台地への疏水嘆願書を提出するなど、淡河川疏水の実現に向けて活動を行った中心的な人物。明治16年に兵庫県会議員に当選したことにより、疏水の実現に向けて前進することとなる。その後、同23年に初代帝国議会議員となり、豪雨により疏水が被災した際には復旧改良工事の実現に尽力するなど、印南野台地の水田開発に大きく貢献している。

『淡河川・山田川疏水百年史』より転載

しかし、淡河川疏水もその後に開発された山田川疏水においても、河川下流域との水利権の問題は依然として残っており、灌漑期に水を引くことができないという制約は残っていました。水利権の問題を解消するためには、新たな水源を確保するしかありません。そして、昭和4年、山田川を堰き止めて小規模なダムである「山田池」を築造しましたが、この地域の水需要を十分に満たすまでには至りませんでした。

東播地域は元々降雨が少なく大河川も存在しないことから、流域全体が慢性的に水不足な状態となっていました。戦後、食料増産が緊急的課題となった際、加古川水系全体に及ぶ抜本的な水利用の見直しが行われ、3つの国営事業によりこの地域に壮大な水利ネットワークが構築されることとなりました。

昭和26年に東条川沿岸の約4,000haの農地へ水を安定供給するため鴨川ダムが築かれ、平成元年に加古川中流の約3,700haの農地を受益地として糶屋ダムが完成、そして平成5年に長年の悲願であった印南野台地約7,500haへと水が導水されました。特に、最期に行われた印南野台地への導水事業が実現するためには、他2つの地域における水源確保が前提であり、また、それぞれ異なる支流に造成された川代ダム・大川瀬ダム・吞吐ダムを導水管で連結し、それらを一元的に管理するという高度な水利システムが存在しています。



『国営事業地区受益地』
(近畿農政局ホームページより転載)